

# 日本記者クラブ会報

## 創立十五周年記念に

### 『ゲストサイン集』を刊行

仁杉国鉄総裁の昼食会は予想外の成功だった。前任者とはいささか違う持ち前の瀟灑な性格が好結果をもたらしたこともあろうが、ベテラン記者たちの迫力あふれる切り込みや、ユーモラスな誘導ぶりがなにももたらしたか。その夜のテレビと翌日朝刊の一面トップが如実に物語っていた。

政府首脳の来訪は国交四百年來初めてという、ポルトガルのソアレス首相（社会党）のきびしいユーロコミニズム批判も面白かった。

土曜の朝というのに百十六人もの内外記者を集め、昼めしも忘れて約三時間の熱弁をふるったシアヌーク会見も、和食弁当もそこそこに大熱

弁の藤尾自民党政調会長の昼食会も、活気あふれたものとなった。

そうこうするうちに、夏がきた。事務局は、秋の十五周年記念の刊行物と取組んでいる。ひとつは『とっておきの話』。創刊以来の会報に載った「新春随想」「かけだし時代」「とっておきの話」のすべてを収録。B6判、二百五十ページ程度のものとなりそうだ。

#### 千余人、三十七冊

もうひとつが、ご期待の『ゲストサイン集』だ。十五周年に内外来訪首脳は千人を超え、サイン帳は三十七冊もたまった。墨痕リンリたる中国の鄧、華、趙、胡ら四首脳。米仏

はじめ各国の大統領、まったく大勢の首相たち。ふりかえるだに豪華ケンランの顔ぶれだ。むろんわが国の首相はみんな在任中に何回もの署名を残している。

そうした千余ものサインの山をどこまでしぼりこむか。会報委員会（深谷憲一委員長）が苦心、協議のすえ、元首、首相を中心に、内外政財界、文化界のトップクラス三百人を選んだ。七月の委員会ですらにしぼって、いよいよ最終選考の運びというわけだ。

それぞれの人柄のじむ立派なサインに写真をそえて、一人一ページ。読めない文言が添えてあるのは、大使館に訳してもらおう。いわずもがなのことながら、いささかのミスも許されない——のが事務局のこの夏の仕事、というわけだ。

十五年間の記録を調べてみて、興味のあるのは出席メンバーやワーキングプレスの数だった。迎えた時

第173号  
1984年  
7月10日発行  
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一  
プレスセンタービル9F 電話100  
◎ 社団法人 日本記者クラブ  
電話五〇三一二七二二(代)

点でのニュースバリューが違うから、一概に人気度を比較できるとはいえないが、参考までに主なものを列記してみたい（敬称略）。

五七年のサッチャー、400名で断トツ。次が同年のミッテラン332名。そして四九年のフォード320名、が「ビッグ3」となる。

中国首脳は来訪順に、鄧304名、華303名、趙230名、胡230名とそろって盛況だった。

キッシンジャー280名、ヤマニ277名、アラファト217名、ゲロムイコ170名というのも、なにかを語るようだ。

日本の総理の、佐藤160名、田中192名、三木178名、福田165名、大平232名、鈴木254名、中曽根258名、という数（複数のうちの多い方）もクラブの発展と比例しているようにみえる。

#### 七月一日現在の会員状況

法人会員	一四六社
基本会員	六二九人
個人会員	一、一五七人
法人・個人賛助会員	六四社
特別賛助会員	一九一人
名譽会員	七二人
計	二一〇社、二、〇六五人

とっておきの話

## 苦しかった一年

—特派員の逮捕と殉職—

小島 章 伸



だけは帰そう」ということから、出国準備にとりかかった矢先の六月七日午前一時、北京市公安局員数名が鮫島特派員宅を臨検、家宅搜索し同君を連行拘留した

「とっておきの話」にふさわしいかどうかはともかく、私の日経記者生活で生涯忘れられないときが二回ある。昭和四十三年（一九六八年）六月七日午前一時と同じく八月二十二日午前四時。前者は鮫島敬治君（北京特派員、現日経大阪本社編集局長）の中国公安当局による連行事件であり、もう一つは酒井辰夫サイゴン特派員のベトナム戦争による殉職である。まさに激動、私にとって最も苦しい一年であった。

「君、大変だ、鮫島が捕まった」当時日経編集局長兼政治部長だった新井明氏（現副社長、日本記者クラブ理事長）からである。私は後任局デスクで特派員をあずかる外報部長。私「どうして——？」

新井「何だか分からない。とにかく連行されたんだ。いま田川さん（誠一氏、現自治大臣）から連絡があった」

遂に起こったか——私はハンマーで頭をぶんなぐられるような思いであった。

実は昭和三十九年秋に日中記者交換がスタートして三年半余り、初めから継続して長期に駐在しているのは鮫島特派員一人であったし、佐藤内閣の登場（三十九年十一月）以来悪化の一途をたどる日中関係のなかで「身の危険さえ感ずる」との報告も入っていたのである。中国の国内では文化大革命の嵐が吹きまくり、すでに国外退去や常駐記者派遣取り消しなどで、北京の日本人特派員も当初の九名から三社三名（朝日、共同、日経）に減員、日本商社員はじめ中国各地で邦人の拘束や逮捕のケースが出ていた。中国側の対日姿勢が厳しさを増すなかで、「危ない。とにかく七月ビザ期限切れの機会に家族

のであった。

こうして翌四十四年十二月釈放までの一年半余り、長く重苦しい「鮫島問題」は続くのである。特に英国ロイター通信社グレイ記者逮捕と違い、日中間に国交がなく、覚書貿易関係ルートだけを通じたの交渉は困難極まるものだったが、われわれとしては「松村路線」に従って忍耐強く対応する以外ないと覚悟を決め、細かいパイプを大事にしながら可能な限りの局面打開の道を探った。この対応については内外からいろいろの批判がぶつけられたが、円城寺社長（現顧問）、中川編集局長（現テレビ東京社長、民放連会長）の態度は毅然たるものがあった。

そんな「松村路線」の中で「スパイ容疑」というのがその内容は——「本人の健康状態は——」「面会と早期釈放の道は——」……さらには差し入れ対策に至るまで、固い中国側相手に折衝された覚書事務所関係者のご苦労は並たいていのも

のではなかったろう。この点、松村謙三（故人）、古井喜実、田川誠一氏ら政治家の人びと、岡崎嘉平太さんをはじめ覚書貿易事務所の人達やお世話になった各界の数多くの方がたにはいくら感謝しても足りないものがある。当時妊娠中だった鮫島夫人（事件発生二週間後に帰国、翌四十四年二月二日長男、康暢君出生）や長女の明子ちゃんもよく頑張ってくれたし、宗像善俊氏（現公取委員）ら在北京の覚書事務所の人びとの親身のお世話と協力がなかったら、われわれはあれほど忍耐強い対処はできなかったかもしれない。

四十四年十二月十七日、鮫島記者国外追放の通告を受け、同二十日に深圳まで迎えに出た私の前に現れた鮫島君は、体が半分くらいになってしまったのではなにかと思われるほどやせ細っていた。極寒、酷暑の獄中でどんなに苦しかったとか。私は申しわけないとの思いで胸がつまった。しかし「真向法」で頑張りましたよ」とにっこり笑ってあいさつしてくれたときには、正直「苦勞の甲斐があった」との実感がわいてきた。

そして本当の意味で、私が肩の荷をおろしたのは、さらに八年後、昭和五十二年（一九七七年）九月末になってからである。一九七六年に周恩来首相が死去し、七七年五月鄧小平氏が復活、その直



鯨島記者連行、酒井記者殉職を報じる日本経済新聞 (43. 6. 9と8.22)

「部長、大変です。酒井君がロケット弾でやられました。重傷のようです」  
 デスタは永田長君（現日経マグロービル常務）だったが、どだい外報部からの早朝の社電は悪いことと決まっている。当

時鯨島問題で頭がいっぱいだった私は、ベルの音で起こされた瞬間、「何か異変が……」と不吉な思いで受話器をとったほどだった。それが酒井君の被弾とは——。彼は安全なホテルで暮らしていたのではなかったか。「何とか頑張ってくれ」と祈る思いで家を飛び出し社に駆けつけたが、情報は暗いものばかり、そしてわれわれの願ひもむなしく朝七時半死去の報が入った。

ベトナム戦争は米軍の直接介入で、しだいにエスカレートしたが、この年の一月には解放戦線側のテト大攻勢があり、サイゴンの危険も日増しに大きくなっていった。私は外報部長として酒井特派員を一時バンコクに移し、情勢を見るよう指示していたが、「小康状態となったから戻りたい」とのたつての要請で、八月十三日にサイゴン入りを認めればかりのところだった。

「安心してください。今度はスプリングホテルの地下に部屋をとって、土のうで囲んでいますから——」

一週間前に受けた酒井君からの国際電話の声はずんでいた。それなのになぜ……。血気盛んな彼は地下室などに引込んではいられなかったのである。二十一日、仕事のしやすい、明るいグエン・フェ・ビルに引越してしまっただった。そして二十二日午前四時過ぎ、運命

鯨島記者がこの歴史の一ページを埋める日はいずれくるだろう。私が触れるべきではないし、また書くこともできない。しかし一つだけ私にとってショックだったのは、当時の中国公安当局がスパイ容疑として並べたいくつかの「罪状」の中に、私から鯨島特派員あての電報、

八月の酒井事件はもっと悲劇的な形で起こった。ちょうどチェコ事件（ソ連軍侵入）の新聞作りを終えて帰宅したのが二十二日の午前一時過ぎ。寢床に入って三時間もしないうちに社電で起こされた。

「部長、大変です。酒井君がロケット弾でやられました。重傷のようです」  
 デスタは永田長君（現日経マグロービル常務）だったが、どだい外報部からの早朝の社電は悪いことと決まっている。当

のロケット弾がわれわれにとってかけがえない、酒井記者の生命を奪い取ってしまった。それもほんの小指の先ほどの破片で。

酒井特派員の日経同期生である鈴木孝信記者（当時政治部、のちにサイゴン特派員、現日本経済研究センター事業部長）を伴った遺体引き取りの旅は、私にとって終生忘れられぬ悲しい旅であった。宿泊したマジエスティック・ホテルの部屋で聞いた砲撃の音、サーロイ寺院で青木盛夫大使（故人）はじめ現地在留邦人の力でやっていたいだいた告別式、サイゴン日本人記者会の酒井君惜別の歌、米軍基地の遺体処理場での苦痛の待機：「現地での数々のことがいまでも私の脳裏に焼きついている。」

ベトナム戦争で犠牲になった酒井記者は悔んでも還ってこない。今年はもう十七回忌である。ただ私にとり唯一の救いは、ご家族がその後元気に明るく暮らしておられること、そして上のお嬢さんの久美子さんが成人して父君の働いた日経に就職、社内の人達にかわいがってもらっていることである。

後に中国大使館から鯨島記者に招待の申し入れがあったのである。そして九月末、国慶節前夜、北京人民大会堂で李先念副首相、党副主席（現国家主席）は、「悪うございました。中国政府と人民を代表しておわびします。あれはすべて四人組の仕業でした」と謝罪したのだった。

電話による「情報ありがとう」の一言が入っていたことであった。中国語では情報は諜報を意味するという。「連絡」か「消息」といふべきところであった。そういうえば「油断一秒、怪我一生」を中国の人は「一秒の油断は一生我を責める」と読むという。中国との関係を同文同種などというので、単純に理解していくことは危険である。

「部長、大変です。酒井君がロケット弾でやられました。重傷のようです」  
 デスタは永田長君（現日経マグロービル常務）だったが、どだい外報部からの早朝の社電は悪いことと決まっている。当

こじま あきのぶ氏略歴 昭和三年東京都出身。五十六歳。早稲田大学政経学部卒。二十六年日本経済新聞社入社。ニューヨーク特派員、外報部長などを歴て、四十二年編集局長、四十七年編集局長、五十年編集局長となり、五十二年取締役就任。五十五年から日本短波放送代表取締役専務、現在、代表取締役社長。五十二年六月から五十五年七月まで当クラブ副理事長。

## ロンドンサミット

## ワーキングプレス

二十時間近く首相と同行の特別機にかん詰となって、ロンドン市内のホテルに着いたのが、七日午前零時を少し回ったところ。ここは同行記者の宿であると同時に、地下には日本人記者専用のプレスルームが設営されており、今回のサミット取材の「現場」ともなつた。ホテルに入るや自分の部屋で旅装をとく間もなく、地下のプレスルームに集合。以後閉幕の九日夕まで、打ち合わせ、記者会見、本社デスクへの送稿の繰り返し。

その合同の一〜二時間の仮眠——という具合でホテルでの嵐のような三日間（というより、たえず締め切りの関係で東京時間を念頭におかざるを得ないため、一日の終わりという意識が薄れる結果、実感としては嵐のような七十二時間）が過ぎ去った。「何が何だかわからないうちに終わってしまうよ」。出発前に同行経験記者が一樣にかけてくれた気休めの言葉通りとなったわけだが、改めて振り返ると、嵐の七十二時間が何ともうつろに感じられる。

信じられないことかもしれないが、この期間中、サミットの会場

であるランカスターハウスにはついぞ足を運ぶ機会がなかった。ホテルの外に出たのは、徒歩で約十五分の支局を訪ねた時だけだ。食事も七日の朝食をホテルのコーヒーパーで済ませた以外は、全て地下のプレスルームで、支局員が手配した幕の内弁当をバクついたのみ。

仕事で来たのだからやむを得ない面もあるが、実はこうしたッかこの鳥ク現象は、サミット取材にも及んでいたといえる。

## 地下室のプレスルーム

全体会議、外相会議、蔵相会議、昼、夕食をはさんだ会談——と会議終了後必ず行われるブリーフを聞き、その原稿処理。しかも会議終了前にも、日本の締め切り時間との関係で早版、中版用と想像力を働かせた会談記事が本社から催促される。ロンドン時間と東京時間を刻む二つの腕時計をにらんで、ひたすら時間との競争を迫られた。

物理的にプレスルームにしばりつけられただけでない。記事の内容についても

である。

会談内容をわれわれにブリーフしたのは、主に水平官房副長官、村田外務省経済局長らであるが、実は彼らは首脳会談の部屋には入っていない。会場から出た中曽根首相から要点を聞き、われわれにブリーフするのである。

だから「この点で各首脳の反応は」との質問にも、「総理から聞いていません」で、会談のふくらみが出てきにくい。彼らには気の毒な点もあるが「総理の発言に、各首脳は静かに耳を傾け一様に賛意の表情をしたそうです」などのブリーフが随所にみられ、失笑を買い場面があつた。

## 入来院 重建

(共同通信社経済部)

し、ふくらみをもたせる記事に仕立てるために、各社特派員はこのホテルとは離れた共同記者会見場での各国のブリーフカパーに当たった。共同も現地地のロンドン特派員のみならず、各国首脳に同行したワシントン、パリ、ボン、ブリュッセルの各特派員が随時フォロワーした。

このため「ミッテラン仏大統領が米高金利批判」など、日本側ブリーフでは出なかつた事実も報道されたが、各国のブリーフを持ち寄って会議の基調となる本

記を仕立てるところまでは、時間的制約もあって実現できなかった。

だから今でもあの地下のプレスルームで書いた本記や解説が、会議内容を正確に反映していたという自信は、恥ずかしいことだが持てないでいる。

「Where is the Japan」。閉幕後、各国首脳がつぎつぎと共同記者会見場でサミットの成果を各国記者の質問に答えながら語っている中で、日本の代表団だけが見当たらなかつたため、このような皮肉のきいた記事を送ったところもあつたそう。

そのころ日本の記者だけが陣取る地下のプレスルームで中曽根首相はテレビのスポットライトを浴びて、「日本国民の皆さまのご支援で、サミットは成功しました」と語りかけていた。

閉幕した九日深夜プレスルームの片隅で、同僚特派員の一人が酔ってつぶやいた。

「代表団も同行記者も日本人記者だけのプレスルームから抜け出ないとダメ。共同記者会見場で各国と同じようにやる時期だ」

空っぽの心身になぜかこの言葉がぐさつときた。

# 健保法改正案

ワーキングプレス

健康保険法改正は、国会では常に難物だった。保険料アップに際して乱闘や徹夜国会が繰り返され、審議混乱のありで社会党委員長のクビが飛んだこともある。

まして三千二百万サラリーマンに医療費の二割（原案では六十一年度から二割）を負担させようというのだから、「クビの一つや二つは今度も」と半ば期待をこめて

見守る野党議員がいて不思議はない。自民党の国対委員長が辞任する事態になったのもいわば健保法改正の「犠牲者」の一人といえるだろう。「ホントは負担を軽くする時の大臣をやりたかった」とボヤいてみせるのは委員会室の渡部厚相だ。

とはいえ、健保法の抜本的改正はどこかでやらなくてはという認識は与野党ともホンの部分としてある。このままでは二十一世紀の医療保険制度が崩壊してしまふのは明

らかなのだから、もちろんこれまで何度かサラリーマン本人に一部自己負担を求める試みはあった。が、「反対」を無理に押し切るより国庫負担を増やすことで問題を先送り。メスは入れずに応急手当てで済ませ

てきた。ところが近年は、毎年一兆円ずつ上がる医療費の増加に対して、国庫負担増はもう望めない。マイナスシン

## 内憂外患、再延長の声も

石橋成彰

(サンケイ新聞社社会部)

が、政府に長年の懸案に取り組ませるエネルギーとなつてい

る。野党も「単に財政的見地からサラリーマンに負担を押しつけている」と「廃案」を固執するより、財源に裏打ちされた対案を積極的に提示すべきときだろう。

質疑が一巡、参考人聴取を終えたところで会期延長、サミット休戦。その間にも国会内外に「反対」の大合唱が続いた。なかでも強力なのが日本医師会。「早期診療が抑制され、健康維持に支障をきたす」とい

うのが理由だが、患者減や過剰診療などの抑制で医師の収入が減るとい

う一面があり、根は深い。そのうえ、現執行部は前執行部を「厚生省の言いなり」と批判して四月にスタートしたばかりというお家の事情がある。勢い反対のオクターブは高くなる。

日医は自民党内の医療議員を動員して「二十一世紀の国民医療を考える会」を旗あげさせた。それが「一丸となつて改正に取り組んでいるのに、中から足をひっぱる目ざわりな集団」（自民党幹部）になつてい

る。まさに内憂外患。二面作戦を迫られる格好となつた自民党だが、「考える会」に対しては、改正推進の議員をいっせい入会させて会の活動を骨抜きにしてしまおうという作戦で

た。一方で厚相が「健保法改正案成立後に診療報酬の値上げも」と言つて、「アメ」もちらつかせている。

健保審議は六月二十一日に衆院社労委で実に四十二日ぶりに再会された。国会の奇妙な慣例で、社労委が開かれるのは毎週木曜日だけ。会期末の八月八日までの審議で、さて衆参両院の社労委を通せるのか。

今国会で成立しないと、今年度予算で四千二百億円の歳入欠陥が生じる。法案成立を秋の自民党総裁選での再選支持の前提にされた中曽根首相はまさに「やるしかない」心境。渡部厚相も「一歩一歩目標に向かって前進している」と言うそばから「何か妙案はないのか」と腕組みをすることが多くなつた。健保法改正の難物ぶりをいやというほど痛感している。

政府は今後「修正」と「解散」の軟硬二つのボールを使いわけて野党包囲網に対処することになるが、一部で再延長の声もちらほら。当事者はもちろん、取材する側にしても暑くて長い「夏の陣」となりそう

## テヘラン特派員

## ワーキングプレス

テヘラン特派員に取材の苦  
 労などあまりない——と書く  
 と、ほかの特派員諸兄からお  
 しかりを受けるかもしれない。  
 が、テヘランに来て半年  
 の実感である。

テヘラン特派員ならだれで  
 も一度は「ホメイニ師に単独  
 インタビュー」を考えるだ  
 ろう。ご多分にもれず、着任  
 早々、助手にアレンジを頼ん  
 だ。ペルシャ語が流ちよ

うに話せる特派員は、新  
 華社の記者ぐらいなもの。  
 各社とも英語のできる現  
 地人の助手を雇っている。

その助手は「駄目です」

と、新米特派員の意気込みを  
 あっさり一しゅうした。「歴  
 代の特派員が申し込んだけれ  
 ども、全部断られました」。  
 「そこを何とかもう一度トラ  
 イしてみようよ」と私。

イラン政府関係者とのイン  
 タビューは、イスラム指導省  
 の報道担当者を通じて行うの  
 が原則。指導省を通さずに、  
 改革防衛隊の学校を取材した

某紙記者は、その後、指導省から大  
 目玉をくらい、助手のプレスカード  
 期限延長時にさんざんいやがらせを  
 された。カードがなければ、助手は  
 職を失うことになるし、助手がいな  
 ければ取材はできなくなる。

わが助手の申し込みに、指導省の  
 回答は案の定「ノー」。  
 ホメイニ師  
 だけではない。ハメネイ大統領も、  
 ラフサンジャニ国会議長も、ムサビ  
 首相も、単独会見はしない、という

## 単独会見はアメリカだけ

話だ。

ならばせめて閣僚でもと食い下が  
 ると「伝えておく」と言うだけで、  
 あとはなしのつづて。石油相に、あ  
 る葬式の席で偶然会ったことがあ  
 る。ここぞと思って直接本人にイン  
 タビューを申し込んだ。「あとで電  
 話する」と言うので、喜んでアドレ  
 スを書いて手渡したが、何の音きた  
 もない。政府要人の直接取材は、記  
 者会見以外は事実上駄目なのだ。

## 追田 勝 敏

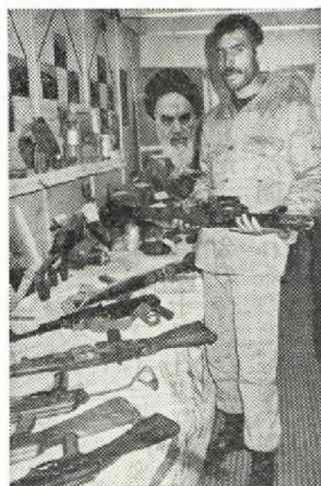
(中日新聞社テヘラン特派員)

そのくせ米国のテレビなどは単  
 独会見に応じたりする。抗議すると  
 「あれは指導省の関知せざるところ  
 」とくる。指導省発行のプレスカ  
 ードで取材している以上、指導省は  
 特派員の「生殺与奪権」を持つ。事  
 実、カードの延長を認められず、国  
 外退去せざるを得なくなった記者も  
 いた。「イランは結局、米国が怖い  
 のさ」と陰口をたたきながら、単独  
 会見をあきらめるわけだ。

だから取材の苦労はな  
 い、と書いたが、あくま  
 でも政府要人の直接取材  
 の話だ。直接取材が難し  
 いとなると、地元の新  
 聞、ラジオ、それに市民

の間のうわさが頼りになる。この国  
 は良くも悪くもテヘランの北、ジャ  
 マランに住む老人ホメイニ師でもっ  
 ている。同師とその側近が何を  
 考えているのか、それを新聞、  
 ラジオの報道などから分析し、  
 探り出すのがテヘラン特派員の  
 いまの重要な仕事になる。

「あの発言は、一週間前と少し  
 違うんじゃないか」停戦を考え



イラク軍からの捕かく武器展示場

ているのかもしれない。親し  
 い記者との意見交換は頻繁だ。  
 記者に限らない。イラン人の中  
 にもこの国の将来を考え、注目し  
 ている人は多い。ジャー時代の政  
 府関係者。金持ち階級。バザール  
 の商人。失業中の若者。タクシー  
 の運転手の中にもインテリは多い。  
 機会あるごとに、そういう人たち  
 と話をするようにつとめる。そし  
 て、ジャマランの政策研究。  
 ソ連の政策研究をクレムリンロ  
 ジーという。それにならえば、イ  
 ランの政策研究は「ジャマランロ  
 ジー」。いまのテヘラン特派員に  
 は、ジャマランロジストであるこ  
 とも要求されている。

## スタジオ訪問

テレビ東京とロサンゼルス社のKOC E-TVのスタジオを衛星中継で結び、世界のホットなニュースを解説する「国際トーク番組」である。「星からの国際情報」は八一年十月にスタートした。タイトルは、同番組の企画に参加している『デスクK』の陰の仕かけ人（たとえばテレビ界では知る人ぞ知る）の発案による。

番組は大宅映子さんが進行役となり、米国在住の国際ジャーナリスト大森さんが国際問題を掘り下げ、独特の口調で解説していく。

「大森さんのユニークな個性と、大宅さんのキャラクターがうまくかみ合って、当初の狙い通り、太平洋を挟んだ話のキャッチボールができています」と語るのは渥美隆雄チーフ・プロデューサー。放映（毎週水曜日午後十一時三十分～十二時）の前日、渥美さんは国際電話で大森さんと打ち合わせをし、番組のテーマを一本か二本決める。

六月二十日（水）午後一時三十分、テレビ東京のサブスタジオを訪ねると、渥美さんと大宅さんがロスと電話で最終打ち合わせの最中。ロス側のKOC E-TVはUCLAの分校の中にスタジオを持つ公共テレビで、技術スタッフは

もちろん全員アメリカ人。そこで中継の日は、大森さんの子息、哲良さんが通訳（東京からのディレクターの日本語を英語）として裏方に当たる。大森夫人もご主人のため番組用カンニングペーパーをつくったりとかで、深夜のロサンゼルスで一家総出ということになるようだ。

## 太平洋をはさみ 話のキャッチボール



「最初、大森さんとの呼吸合わせが難しかったけど、いまは慣れました。声の伝播に〇・四秒の遅れがあるんです。これ、いざ言葉を決もうとすると大きいんですよ」と大宅さん。大森さんはテーマの打ち合わせやリハーサルでも、詳しい内容までは触れない。「一度話してしまると、話し終わった気になっちゃって、本番の時忘れてしまうから」ということなのだそう。

二時十五分、大森さん抜きでカメラリハーサル開始。この日のテーマは「移民法改正問題」と「麻薬問題」の二本。大宅「大森さんのお話、どう進むか分かりませんが、ここでコメントをまとめて番組をしめます」

全く台本ナンなのだ。「このスタイルで、大森さんを相手に国際問題を語る日本女性は彼女くらいでしょう」という渥美さんの言葉がうかぶ。

リハーサル中にロスと衛星をつなぐ。そこで大森さんに「星でのインタビューを試みる。」

「僕は以前物書きだったわけで、その物書きの目と耳で、ビジョンを持って国際問題をわかりやすく伝えたいと思って

います」。夜空の星から流れてくるような意外にソフトな声がかえってくる。本番録画の際も、ロスの大森さんの方はモニターはなく、大宅さんの声がイヤホンから流れてくるだけ。大変でしょう？

「いやー、カメラをにらむとそこに大宅さんの顔が浮かんできます。声を聞いただけで表情がわかりますよ。いまや以心伝心の仲ですね」

「僕、いつもディレクターとの打ち合わせ通りにやりませんからねえー。大宅さんの方が大変でしょう」

大宅さんのセンス抜群の服装を想像するのも楽しみのひとつ、と本番前の大森さんは楽しそう。

二時三十五分、録画撮り開始。タイムキーパーの「予定ではCMまで残り何分」とカウントする声がひびく。大宅さんはその声と大森さんのコメントを聞き分け、まとめ用のメモをとる。もちろん大森さんにはカウントは聞こえない。録画撮り中も国際電話はつながったままで、祖父江敬三報道部長が受話器を持っていて。この日は途中米国から音声不良の連絡がこの電話で入った。

三時すぎ、自由進行の録画撮りが無事終了した。この番組はテレビ愛知、テレビ大阪にもネットで放映されている。（長谷川）

先月のクラブゲスト

ノロダム シアヌーク 民主カンボジア大統領



クラブ史上、最長の会見になった。午前十時三十分開始で正午終了予定が、なんと午後一時二十分まで、二時間五十分。質問を受けるのが本當にうれいといった様子。よろしければ、私はまだお腹がすきませんので……と延長、また延長。この日(六月二日付)東京新聞朝刊スターブの、金日成主席からの中曾根首相あてメッセージの伝達については、「政府の賓客として来日しているの言及は控えたい」としながらも、「金主席の希望はよく知っているの、北京の私邸へ来てもらえれば喜んで話します」。

相発言を掲載。その後、六月二十一日、大統領は北京で、読売の特派員らと会い、メッセージの内容、仲介のいきさつを明らかにする。【二日(志) 記者会見 司会 友田錫企画委員 通訳 横田謙 出席 一二人】市川真紀夫 石油問題評論家 OPECの二九ドル体制の矛盾、すなわちイランの安売り黙認が今回の湾岸危機につながったが、すでに局面は新しい展開を見せはじめたとする。短期的な石油シグナルは、昨年暮れのソ連の中東政策の変化で青味を帯び、サウジアラビアの防空能力強化の決断で青になったと結論。【二日(月) 研究会 司会 平田真巳企画委員 出席 七五人】大場智満 大蔵省財務官 「皆さんは交渉と言いますが、私は日米対話と書いていました。最初は「考えてから歩こう」と思ったが、途中で「歩きながら考える」に変更の米側とのやり取り、報告書作成の経緯などを語る。【二日(月) 研究会「金融・資本市場の自由化」(V) 司会 平田真巳企画委員 出席 六五人】



仁杉 巖 日本国有鉄道総裁 翌日の各紙朝刊の扱い。朝日、東京は一面トップ、毎日、読売、日経、サンケイも一面扱い。ニュースは久保会員(共同)の質問によって生まれた。総裁はスピーチでは「私はこういう立場なので分割賛成とか反対とか申せ



マリオ アルベルト ノブレ ソアレスポルトガル首相

種子島の渡来は一五四三年。が、同国首脳の前日はこれが初めて。訪日印象を問われた首相は、「書物を通じて先進国の一つの柱であることは知っていたが、日本のダイナミックな活力と様々な知識に触れて驚いている。ユーロコミニズムについては、「共産主義者はレフトでない。世界でもっとも保守的な連中」と手きびしい。【二日(火) 記者会見 司会 渡辺恒雄理事 通訳 赤永史郎、緑川高廣 出席 九八人】



波多野敬雄 外務省中近東アフリカ局長 五月にイラク、六月にイランを訪問した、波多野局長のブリーフィングとあって、二二名の盛会。事情報に出席者の目は輝きつばなし。【二七日(水) 研究会 司会 高野洋企画委員 出席 六四人】

筒井良三 防衛庁技術研究本部企画部長 (現技術参事官) テーマは「日本の軍事技術」。潜水艦では電気が貴重なのでパンを焼くのもままならない。そこで「食パンを一月もたす法」も自衛隊では立派な研究テーマと、ユーモアを混ぜ話しづらい問題をさげろ。【二七日(水) 研究会「軍事技術」(R) 司会 本島企画委員 出席 四八人】





プロフィール

(七月一日付入会の個人D会員、個人賛助会員、特別賛助会員の方がたです。)

# 紹介 会合

1日▽東信夫さんの受章を祝い会（共同西崎哲郎会員） 4日▽第一回工務共同研究会懇親会（協会今田昭会員）▽写真記者協会 プロ野球オールスター戦カメラマン席打ち合わせ（共同 石渡和夫会員）▽チームズ会——元ロンドン特派員、商社員夫人らの集まり（フジTV 渡辺修会員）

6日▽為替情報研究会（日経 青木克之会員）▽同友会・労務研究会（協会山田幸男会員）▽岡孝さんを囲む会（毎日 四方洋会員） 7日▽JRNニュースハイライトデスク総会・第十四回ニュースハイライト賞贈賞式（TBS 高橋稔会員） 8日▽在京九社編集局長会（協会 宝子山幸充会員）

▽民教協本支社連絡担当者会議（テレビ朝日 今井慶一会員）▽東北新聞連盟（岩手日報 高橋孝雄会員） 9日▽FM問題中央八社会（読売 高山登会員） 12日▽ソ連ジャーナリスト同盟代表団昼食会—イワン・ズブコフソ連ジャーナリスト同盟副議長ほか七名（協会 阪田秀会員） 14日▽朝日新聞論説OB会（朝日 黒川宣之会員）

▽第七回在京岐阜県人懇談会（岐阜日 日 白井英雄会員） 18日▽十七社会（南日本新 入田良男会員） 19日▽新聞広告報編集実行委員会（協会 権田萬治会員）▽白川兼悦氏を励ます会（協会 佐藤嘉男会員） 20日▽航空ジャーナリスト協会懇親会（富重静雄会員）▽小菅、茂野、藤井三氏を囲む会（東京 広瀬一郎会員） 22日▽放送通信制度研究会（NHK 片岡俊夫会員） 23日▽マスコミ研究会（内川芳美会員） 25日▽外信部OB会（時事 滝川勇会員）▽車社会研究会（茂野豊次会員）▽道新ブックガイド企画会議（道新 太田俊郎会員）▽真野義人氏を送る会（中日 岡部太郎会員） 27日▽フジサンケイクラシック記者発表（フジTV 渡辺修会員）▽ジェフ・ヒテック氏を送る会（サスケイ 川中真会員）▽第五十五回定例会員総会（協会 宮地進吾会員） 28日▽東京愛媛クラブ例会（愛媛 堀定省会員）▽新聞協議会 ゲスト 藤波孝生官房長官（東奥日報 柿木原政則会員） 29日▽高橋延清先生「樹海に生きて」出版記念会（朝日 伊藤牧夫会員）

（会員がクラブ施設を利用して行った会合の主なものです。六月の総回数は一九回でした。）

## 第10回施設運営委員会

昭和59年6月8日（金）  
日本記者クラブ大会議室

「クラブ利用に関するお願い」の改定作業を終え、九月中旬改定版発行で、理事会へ答申することを決めた。

出席 小林委員長。梅本、宮地、山崎の各委員。

## 第52回会報委員会

昭和59年6月13日（水）  
日本記者クラブ小会議室

七月号の編集方針について協議した後、十五周年記念として出版する『とおきのお話』、『ゲストサイン集』について協議した。

出席 深谷委員長。井出委員。

## 第83回会員資格委員会

昭和59年6月14日（木）  
日本記者クラブ大会議室

七月一日付の入退会を審議し、理事会へ答申した。法人賛助会員の入会条件について検討した。

出席 渡辺委員長。中川、加藤、亀山、内藤、山同、上野、桝邑、長竹の各委員。

## 第113回企画委員会

昭和59年6月22日（金）  
日本記者クラブ宴会場

七、八月のクラブゲスト選考について協議した。

また「××氏が日本記者クラブで講演し……」と扱われるケースの多い、クラブ主催の昼食会、研究会などの会合を、どう会員社に書いてもらうのがよいかについて意見交換した。

出席 藤村委員長。本島、伊藤、石丸、高野、水野、武藤、浅野、有馬、石山の各委員。

## 第78回理事会

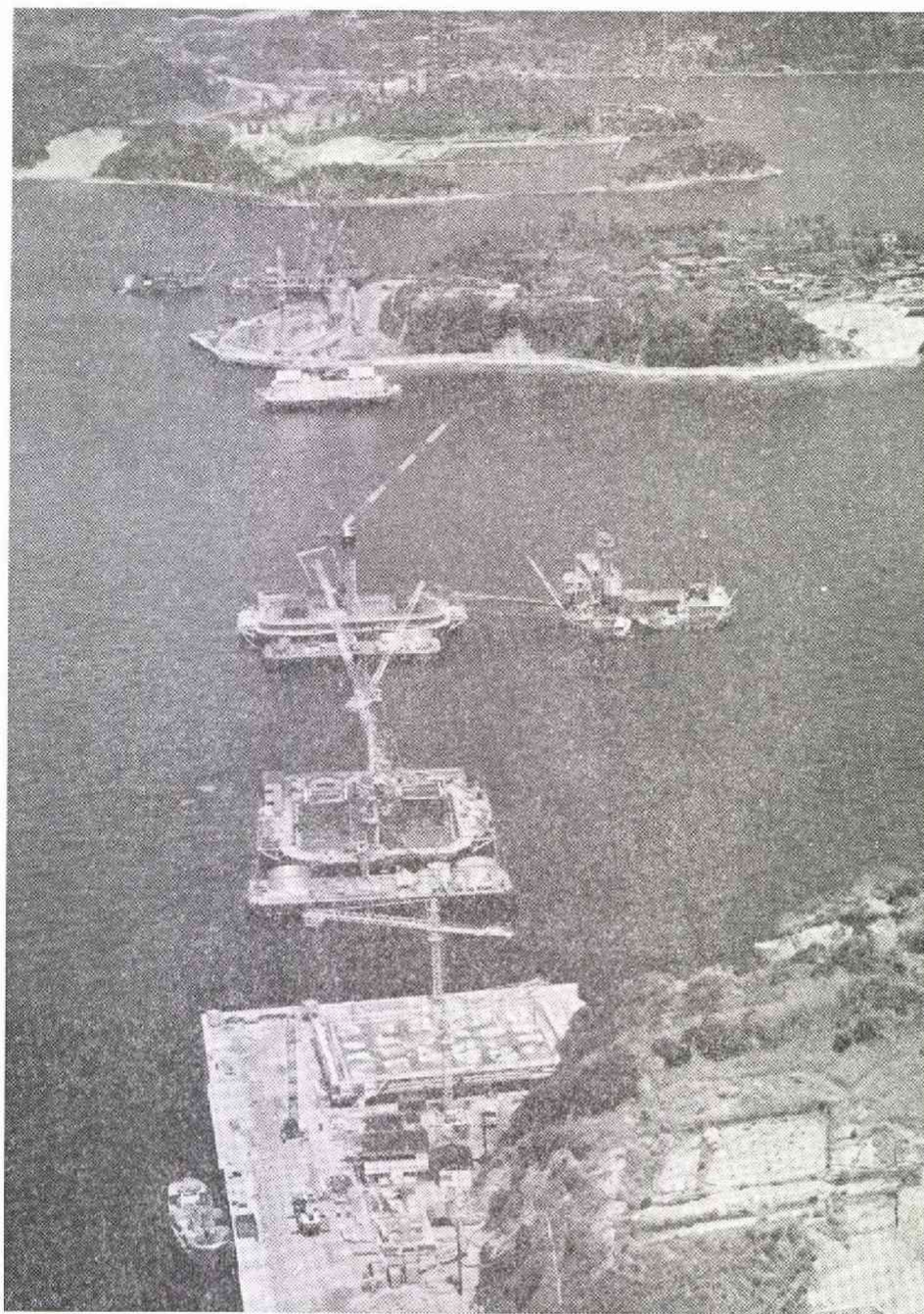
昭和59年6月29日（金）  
福田 家

一、創立十五周年記念事業として、①十一月一日午後零時半から記念パーティーを開催する ②会報委の編集で『とおきのお話』、『ゲストサイン集』の二冊を刊行し、全会員に配布する ③以上あわせて約九三〇万円の経費は特別積立金をもってあてる。

一、「ルール・ブック」の改定について施設運営委からの答申を承認、九月中旬に改定版を刊行することにした。

一、昭和六十年、六十一年度の日本記者クラブ賞推薦委員会委員長を内田健三会員に委嘱することを承認した。他の委員は追って理事長が委嘱する。

出席 新井理事長。中江、常盤副理事長。渡辺（襄）、渡辺（恒）、酒井、小林、太田、若松、南里、渡辺（修）、松元、深谷、山田、泉の各理事。



# 写真部

瀬戸大橋・児島―坂出ルートは五十三年十月に着工された。三つのつり橋と二つの斜張橋、一つのトラス橋で五つの島々を結び、六十三年春には優美な架橋ラインで瀬戸内海をひとまたぎする。

写真 山西哲男 (山陽新聞社写真部)

## 酔い止めのカメラ

航空写真取材のとき、パイロットは言う。

「現場上空での私の役目は、まあ、脚立運びです」

写真部員も、仕事のこととなると遠慮はしない。セスナを「飛び脚立」扱いで「もつと右」「突っこんで、ハイ、急旋回」と大声をあげる。開けた窓からの爆音に消されまいと大声だ。

急旋回は、翼が邪魔にならないためだが、気に入る写角をつかむまで、セスナは現場上空を旋回しては急降下、急上昇。

何度も、そういう取材に社会部員としてつきあったが、必ず大封筒をさり気なく用意した。

酔うなんてものじゃない。目がまわって吐いてしまうのだ。

平気なのは写真部員だけである。すごいなとほめたら「カメラなしだったら酔っちゃうさ」。

瀬戸大橋を、内定するときからもう数十回も撮り続けている山陽新聞写真部の山西哲男記者を私はねぎらわない。

「ご苦労さま、同乗の社会部さん」 (文・中沢道明会員)

●囲碁の会○

六月は夏季大会と指導対局の月。最終日の三十日、総勢二十六人が三クラスに分かれて覇を競うとともに、六人が藤沢一就三段に挑戦した。

藤沢三段はご存知秀行名誉棋聖の子息で、十九歳の若武者。つい先ごろ昇段したばかり。前夜まで強羅・石葉亭での本因坊戦最終局の記録係をつとめ、この日朝箱根の山を下りてかけつけてくれた。

殊勲の白星をあげたのは大日向三段（日経映画）と山中二段（中国新聞）の二人。大日向三段は三月にも小山嘉代二段に勝っており、わが同好会きってのプロキラーとなった。

大会の成績は次のとおり。

AクラスⅡ優勝・安原和雄五段（毎日）、二位・伊藤光彦五段（毎日）。BクラスⅡ優勝・山崎政人三段（D・初参加）、二位・山中昭二段。CクラスⅡ優勝・山田健一初段（ABC協会）、二位・小野盛四郎二段（D・初参加）。



一就三段に挑戦する宮沢・大日向両会員

優勝の三人は後日、秀行名誉棋聖の雄こんな筆致になる色紙「高趣」（吉沢会員の寄贈）をかけて総合優勝を争う。次回例会は七月二十一日（土）午後一時から。

夏のレストラン 土曜の夜は休みます

例年どおり七月、八月の土曜の夜のレストランを休業させていただきます。

左記の七日間に限って、夜はラウンジのスナックテーブルでお食事をしていただくこととなりますので、ご了承願います。メニューは変更ありません。なお、お昼のレストランは通常どおりオープンします。

△夜のレストラン休業日▽  
七月十四日／七月二十一日／七月二十八日／八月四日／八月十一日／八月十八日／八月二十五日

新しい会員名簿をつくります

八月一日現在で、新しい会員名簿を作成します。個人D会員、特別賛助会員の方がたで役職、住所、連絡先などの変更がありましたら、クラブ事務局の長谷川、河野（五〇三）二七二一までお知らせ願います。

会員の著書（ご惠贈いただきました）

実証 財政改革	西村 友裕
ひとりぼっちの英語人生	村田 聖明
離婚の構図	四方 洋
中国の冬	田畑光永 訳
キャッチフレーズ一発必中	佐藤 永充
ドル&円	今 静行

寄 贈 書

空戦フォークランド A・プライス、J・エセル共著  
BRITAIN 1984 英国大使館

クラブ訪問者

6月18日／李禹世（ソウル新聞主筆） 23日／ラルフ・クローマー（サンフランシスコ・プレスクラブ）

ゲスト・カード

エドワード・オニール（ブリテン紙・オーストラリア）

計報 柴田徹夫会員（九州朝日放送）が、六月二十九日心不全のため逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

七月の行事

10日（火）午後0時30分～2時 ローラン・ファビウス フランス工業・研究相昼食会 宴会場

16日（月）午後1時～2時30分 研究会「世界経済の新潮流と日本の役割」 吉富勝経 企庁経済研究所次長 記者会見室  
午後3時～4時30分 研究会「手のつけられない問題」（V） テーマ 地震 正村史朗総合科学研究所所長 記者会見室

17日（火）午後1時30分～3時 森繁久彌氏を囲む会 宴会場

会報委員長 深谷憲一

委員 Ⅱ 桂敬一 井出新六 斎藤吉史 安延久夫  
連絡 Ⅱ 長谷川 河野（事務局）五〇三一二七二一